
世界をしらない少女

まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界をしらない少女

【NZコード】

N9060X

【作者名】

まり

【あらすじ】

狭山 辰徳（35）の前に突然現れたのは、髪をバサバサとなびかせ、ボロボロの服を着て痩せこけた女。

彼女は中学生の頃に亡くなつた初恋の人だつた。

死んだと思っていた人が突然現れたことに戸惑つ辰徳…

彼女は中学生の頃に、義理の父に暴行につながることができたと告白

死を選び、山で死にきれず子供を山の中で出産、山で子供を育てたと語る。

そして彼女は辰徳にお願いをする

もつ自分の命は短い、どうか子供を助けてほしいこと。

山の中で育てられた少女、彼女は山の中だけがすべての世界…

戸惑う辰徳だが、少女を救いにむかう決心をする。

この世界をじらないう少女と向き合つ辰徳だが…

たつのことばみぶ女

「ああ……もう二回な時間か……」

そつしふせきながら、僕は窓に向かた。

「真つ暗だな……」

時計は午後9時をまわつていた。

「また、おやくなつたな、今日は二度目だ……」

僕はあわただしく机を片付け始める、いつものように大きなため息をついたあと、部屋に鍵をかけ足早に階段をかけ降りる。

「あー、肩ついー

僕の声が階段に響き渡る、毎度毎度のことだが何で僕ばかり残業なんだよ！

そつしふせきながら、僕は窓に向かうとまわしだす。

もつ誰もい会社、何となく薄気味悪い…

「しかし何でこのビルは、エレベーターついてないのかな！」

僕の働く事務所は、ビルの五階にある、毎日の登りおりは疲れた体に大ダメージだ…。

長い階段をおりていくと、もう誰もいない会社で一人だけ僕を待つているやつがいる、そいつは一階の窓口にある大きな一枚の鏡とその中に写る僕だ。

「今日も一日お疲れ様、また明日」

そり、鏡の中の自分に挨拶をして帰るのが僕の日課だ…。

僕の会社から自宅までは、車で30分程度の距離だが…。

いつも街灯もない山道をはしつていると、同じ道を永遠にまわり続けるのではないかといつ錯覚におちこる。

本当、田舎だよ。

しばらく走り続けると、ポツンポツンと光が目に飛び込んでくる、寂しいながらにキラキラと輝く町のあかりだ。

「ただいま…」

そう光につぶやくのも、いつの間にか口課になっていた。

光が見えてほどのく、僕の血色も見えてくる。

今田も一田頑張ったよ本当に、僕は疲れた手つきで車を車庫にまわした。

そして、いつものように、バックで車庫に入ろうとした時。

「ん…なんだ…」

「//マー」じに、僕の耳に飛び込んできたのは、車庫のすみに小さく丸まつた黒い物体だった…。

「なんだあれ？」

薄暗い車庫の中では、//マー」じにそれが何なのか確認する事はできない。

僕は仕方なく車をおりて、黒い物体の確認にむかった。

コシン、コシン…

静まり返った車庫の中に僕の足音が響き渡る…

コシン…コシン

ガサ…！

「えつ…? うわあ！」

突然動き出した黒い物体に僕は思わず大声をあげる！

「 もやあ

僕の声に驚いたように、黒い物体が声をあげた。

え…？女性の声…？

人なのか？

「 だ、誰だ？」

僕の声に反応するかのように、黒い物体は立ち上がり、その姿はようやく人だと認識できひとまずほっとする。

しかし、こんか時間に人の家の車庫にもぐりこんでいたやつだ、僕は自然と拳に力が入った。

しばらく一人の動きがとまる…

「た…たつ…のん?」

先に声をあげたのは相手だったが

え……！い、いま何て…

得たいの知れない人影から聞こえてきた声に、背筋が凍つた…。

たつの人…それは、僕がまだ中学生の頃に呼ばれていたあだ名。

聞きなれたあだ名…

しかし、そう呼んでいた人物はただ1人だけ…

いつも

笑顔で

飛び付いてきた

あいつ…

僕の…

初恋の人…

「たつのん…」

再び聞こえる声。

「や、やめひーだ、誰だー！」

体から血の気がひいていく

聞き覚えのある声…

冷や汗が体を流れ落ちる…

心臓が今にも爆発しそうな勢いで鼓動を打つ

だつて

だつて…あこつは、あこつは、中学生の時に死んだんだ！

かなえ

僕は、ゆっくりと後退りをする……

それに、合わせるかのようにこちらにむかってくる人影！

恐怖で目がらそらせない……

やがて、僕の体は外の街灯に照らし出される。

そして……彼女も……。

「あ、あああ

次の瞬間、僕の目に飛び込んできたのは、髪をバサバサになびかせ、ボロボロの服に身を包まれ全身痩せこけた女性だった。

「たつのん……

僕の名を呼び続ける女性

その姿は、まるでお化けのようだ！

「ふりけるな、お前誰だよ

必死に声をふりしぼりながら、彼女を睨み付ける！

「わ、わた、私は…」

かすれた、とてもか細い声…

「私は、か、かなえ…です」

そつと泣いた瞬間、彼女は泣き崩れしていく。

必死でこいつらをみながら、口を動かしていふ、きつと声にならないのだから…。

かなえ…。

間違いない…彼女の名だ、中学生の頃に亡くなつた彼女と同じ名前、前、そして、かすれてはいるが懐かしい声…。

一体どうなつているんだ、目の前の彼女は幽霊なのか…。

「ゴクリと大きく息をのむ……

「う、う……うわあ、う

目の前で、かなえを呟く女性の姿に困惑いを隠せない。

そんな僕の前で必死に涙をぬぐつ彼女……

「か、かなえは……し、死んだんだ！君は一体何者なんだ！」

僕の言葉に反応するかのようこそ、顔をあげ僕を見つめる。

「し、死んだんだ……やつぱり、死んだんだ……」

「……な、何を言つてるんだ！」

彼女が、まっくつと近くで歩みよつてゐる。

僕はその歩みと一緒に歩みよつてしまつ。

「死んだん事になつてて、当たり前だよね…」

「えつ?」

「たつのこと、かわらなーね…」

「…………。」

「…………。」

言葉がでこない。

「あべりがま、よー一緒にひとつべたよな

「

「……」

僕はその言葉を聞いてハツとしてしまつ。

確信するしかなかつた。
間違いない、かなえだ。

僕の家の庭には、さくらんぼの氣が植られていて、昔よくかなえと一緒に木に登つてたべていた。

彼女との一番の思い出だ。

「へ、嘘だろ……かなえ……お前、幽靈なのか？」

「やひ、なりたかつた……かな」

「何を言つてゐるんだ……」

頭の整理なんかできるはずがない、今この瞬間の現状だつて受け入れることも、理解することもできない！

落ち着く事だつてできないが、今僕の目の前には、かなえらしき人が立つていて。

「とにかく…中に入らないか？」

僕は何を言つてゐんだ！

「いいの？」

でも、このまま逃げるわけにもいかない。

僕は「クリとつなづく。

「わたし、幽霊かもよ…」

「そ、それを今から確かめるんだ！」

僕の言葉に彼女は、涙をためた目で少しだけ微笑んだ。

肩ごしに彼女の視線を感じながらゆっくりと足を進めていく。

何がどうなつてこるのか。

僕は震える手を必死でかくしながら、玄関を開けた。

「あの……」

ビクッ――

彼女の声に思わず飛び上がる。

「な、なにか?..」

「あの、こんな格好なんですが、おじやましていいんですか?」

彼女の声がいちだんと小さく、大きく顔をそらしていく。

「……。」

先程とは違い、玄関からもれる光でハッキリと彼女の姿が見えてくる。

「、これは……」

肌は驚くほど汚れて黒く、髪は地面までつたいボサボサと広がり顔をおおつている。

服はボロボロすぎて、服のかたちをなしていなかった。

本当に、かなえなのか？

もし、そうだとしたら…彼女に一体何が？

「ダメ？ですよね

「えっ？」

しました、思わず黙りこんでしまっていた。

「い、いや、えっと……し、シャワー使っています？」

あれ？なにいつてんだ僕は……しかし、確かにこの格好であがられるのね。」

「ここんですか？」

「び、びつだ

「あつがとつ

そう言つと彼女は頭を大きくさげて、スタスターと歩き、僕の横を通りすぎていく。

彼女は迷つことなく、家の裏口に向かっていくのがわかった。

僕はあらためて思った！

本当にか、かなえ…なのか。

彼女は、迷つことなく裏口にあるお風呂場に向かっているんだ。

かなえとは、子供の頃からよく遊んでいて、悪いことをして汚した服を親に内緒で、よく裏口にまわりお風呂で洗っていた。

かなえ…。

僕はバタバタと部屋にあがり、裏口の鍵を開けた。

「あつがとつ

「いや、本当に、かなえなんだな

彼女は「くちりと頭を下げ、鼻をすすつてい
る。

「服、僕のおことへかり

「あつがとつ

そして、僕は自分の部屋へむかつた。

涙

遠くから、シャワーの音が聞こえる……

「かなえ……」

まだ、僕の心は半信半疑だが……

「ふう…」

僕は、服を手に取りお風呂場へ向かつた。

お風呂場から叫び声ともとれるような声が聞こえる。一

「えつ？ ちよつ！ か、かなえ？ 大丈夫か？」

慌てて声をかける！

すると

僕の声と同時にシャワーの音がとまつた！

力チャヤ…

えつ？

「「あんなさい、うるせかつた？温かいお湯浴びるの久しぶりすぎ
て」

彼女は、ドアを少しだけ開けそこから顔をのぞかせ、苦笑いしてい
た。

「か、かなえ、かなえ、かなえ！」

「たつのん？」

僕は、その場に泣き崩れてしまった…。

シャワーを浴びてキレイになつた彼女の顔は、痩せこけてはいるも
の、間違いなく彼女の顔だった。

「たつのん？大丈夫…」

ハツ？

「着替え、おいとく、僕のだけどつかつて」

そう言つと、僕は顔をあげないまま逃げるよつにこの場を離れた。

落ち着け、落ち着くんだ！

かなえは、生きていたんだ！死んでなんかなかつたんだ！

口から心臓が飛び出してきそうなくらい緊張していた、いろんな気持ちがまざりあってパニックになりそうだ！

僕はふらふらになりながらリビングに座り込んだ。

「たつのん？」

「わあわあわあわあわあわあわあ！」

「せせせせせ」

僕の驚いた声に、驚いて彼女も叫ぶ！

ふと、気がつくと彼女がシャワーを終えて立っていた！

「」のやうに

「び、ビックリした

「は、はやかつたね！」

「えっ？ 結構長くつかわせてもらつたよ」

ま、マジか！時間がすぎたことさえわからなかつた。

目の前に立つてゐる彼女は、先程までとはまるで別人で、髪はタオルでくるみ肌も白くなつていた。

「シャワー…ありがとうございます」

「い、いや、えっと…適当に座つて」

彼女を見るとまた涙があふれだしてくる。

「飲み物入れてくれるよ

また僕は、逃げるよつたの場をさつた。

僕は、必死で涙をぬぐいながら台所へむかう、落ち着くんだ！落ち着け！

「 そ う だ 、 お 茶 だ 、 お 茶 を い れ よ う 、 お 茶 ～ ～ お 茶 ～ ～ ！」

「お茶、お茶おなかすりやー。おなかー」

「た、たつのん？」

「…せせせせせ」

ハツ？！

しまったー！ビックリしてまた思わず叫んでしまった！

ରାଜାରାଜେନ୍ଦ୍ର

「ハハハハ、ハハハハ」

きょとんとしていた彼女の顔が笑つた…。

「ハハハハ」

そして、僕も一緒に笑った彼女と一緒に笑うのは何年ぶりだろう。

そして、僕らは一人でしばらくの間泣き崩れながら笑いあつた。

せきていた

「かなえ、とりあえず座つて、聞きたい」とだらけだよ

「うん」

僕らはリビングの椅子に腰かけた。

「かなえ、今までどういたんだ？」

「…………」

「…………」

「ナニ、エ？」

「山って……。何を言つてゐるんだ！」

「あのね、あの…」

かなえは、口を動かしながら下をむいた。

「かなえ、ゆづくつでいいから」

かなえは、小さく頭を上下している。

しばらくの沈黙のあと、かなえの鼻をすする音だけが部屋に響いていた。

よほどつらうと思つて思つていたのだ。

「あのね、何から話したらいいのかな…」

少し頭をあげては話さうとするが、また下をむく。

そんなしぐさを何度も繰り返す
そして、かなえはまた黙りこむ

僕はかなえが話してくれるのをじっとまつた。

もう何年前になるのだろう、僕が15才の頃だ、かなえとは家も近くで子供の頃からずっと一緒に遊んでいた。

毎朝同じ時間に待ち合わせをして、一緒に学校に通っていた。

その日もいつものように彼女がくるのを待っていたんだ、しかし何時になつても彼女は来なかつた。

その日からずっと…。

僕は毎日彼女を探した、僕だけじゃない僕のまわりの人達も、警察も彼女の両親も…。

でも彼女が見つかることはなかつた…。

それからしばらくして、警察と両親がかなえの部屋で「死にます」と書かれたノートを見つけてします。

見つからない彼女、まわりの人々は彼女の死をつけいれた。

そして、僕も…。

「あのね…」

「えつ…」

あつ…いけない頭の中が整理できなくて、つい考えいで頭がいっぱいになってしまつ。

「「めんな、どうした?」

それから、かなえはゆっくりと話しあじめる…

父親

「私ね、死のうと思つたの…。」

「うん」

彼女の腕にどんどんと力が入るのがわかる、一瞬でみに震えながら、力一杯拳をにぎつている。

「かなえ、大丈夫か！」

僕はとつさに彼女の手を握つた！

なんて細い手をしているんだ、それにとても冷たい…。

「あつたかい」

「えつ？」

「ありがとう」

そう言って彼女はにこりと笑った。

ああ、この顔だ僕の大好きな笑顔だ。

「私ね、あいつに…あいつ、に」

「うん、あの…かなえあいつって？」

ギュッ！

かなえが僕の手を強くにぎりかえしてくれる。

「お、お父さん…」

「えつ？おじさん？」

かなえが大きく頭を下げた。

「あいつは、本当の父親じゃない……から」

「うん」

かなえの本当のお父さんは、かなえが生まれてすぐになくなつたらしく、今の父親は僕らがまだ小さな頃にやつてやつた。

「おじさんがどうかした？」

「私は！？」

かなえの声が突然叫び声にかわる！

「私は、あいつにおそわれたの！」

……。

えつ？

今、なんて…。

「私は、お母さんのいない間におそわれたのー。」

嘘だ…。

「あいつこー。」

嘘だ！

だって、おじさんまかねえがいなくなつた時に本当に心配して、必死でかなえを…。

「それだけじゃない、私はあいつの子供を…」

「子供を…？」

何を言つてこるんだ…まさか、おじさんの子供…。

「うわああああああ」

かなえが大きな声で泣き崩れ、僕は彼女の体を強く抱きしめた！

「かなえ、かなえ…」

嘘だろ…、おじさん！嘘だろ。

こんな事が、こんな事がおきていいはずない！

ちくしょ！…！

かなえは一體どんな体験をしてしまったんだ！

「うわあああああ、うわああああああ

「かなえ、大丈夫だから、かなえ…」

のれみ

「ひつぐ、ひつぐ

「かなえ…大丈夫?」

「お母ちゃんには、言えなかつたの」

おばさん、かなえは知らないんだおばさんはかなえがいなくなつたあと病氣で亡くなつてしまつたんだ。

しかし今は、「この話はやめておいで。

「子供がお腹にいる」とがわかつて、私は山に行つたの、死のうつて…思つた…。」

怒りと切なさが込み上げてくる、僕は何も知らず…あんなにいつも一緒にいたのに。

僕は…。

「死ねなかつた…死ねなかつたの」

かなえは、涙をぬぐいながらゆっくり語り話をしてくれた。

しかし、僕はなんと声をかけていいのか正直わからなかつた。

「私ね、さつともいつ長くないと思ひ」

「えつ？」

突然のかなえの言葉、何をいいだすんだ？

「たつのん…私ね子供産んだの」

「ええー。」

「今も私を山でまつてゐ、あの子は山から出た」などが一度もないの

かなえが僕の両腕を強くにぎりしめながら、僕の顔を必死にのぞきこみ強く叫つた。

「お願い、あの子を助けて

「ちょっと、かなえ落ち着いて、山でつて、いつたい何処なんだ？
それに長くないってどうこう意味だよ」

あれ？

「かなえ？」

かなえの体がどんどんと倒れしていく！

「かなえ！かなえ、かなえーー！」

「たつのん、お願ひ…あの子を助けて」

かなえの声がひびくなつていいくのがわかる。

「かなえ、しっかりしろ」

「名前は、のぞ…み、場所は…」

声までもどよどよと小さくなつてこく…

嘘だらけつかもで普通に話してたじゅないか…

「かなえ、まつてり今救急車呼ぶから」

立ち上がりつとある僕の腕をつかんでくる彼女…！

「場所は…」

「かなえ… わかつた、場所どー?」

小さくなる声に僕は必死で耳をかたむけた。

「必ず助けに行くから、だからかなえ病院にいー」「ー」

突然じすつと彼女の重みが体にのしかかる！

「かなえ？かなえ！」

だらりと力がぬけている手を握りしめる！

「嘘だろ、かなえしつかりしろー！」

意識をうしなつてゐる！

僕はあわてて救急車をよんだ。

病氣

静かに時がながれる……。

かなえ……。

僕とかなえは、近くの病院にいた。

「辰徳」

声の方に顔をむけると、僕達の同級生でもある山本が立っていた。

「辰徳、彼女は一体誰なんだ？」

「山本先生、あいつ助かるよな」

山本はこの病院の医者で、かなえのこともよく知っている。

「先生はやめろ、それより彼女に見覚えがあるんだが、カルテの名前も…」

「山本…」

「まさか、幽霊でもつれてきたのか？なんて…」

「かなえだよ…」

二人の間に沈黙がながれる。

「しかし、彼女は亡くなつたはずだろ」

「僕も…驚いた。」

山本が頭をぐしゃぐしゃとかきはじめた。

「山本、僕ちょっと行かなくちゃ……」

「おー、ちょっと待てよ」

僕はふうふうりな足でゆっくり立ち上がり、山本に深く頭を下げた。

「かなえとの約束なんだ、必ずもどつてくれるからそれまで彼女をよろしくお願ひします」

「お、おー辰徳

僕は頭を上げて歩き出す。

「かなえ……必ずつれてくるからまつてうよ。

「はあ、あいつ大丈夫なのかフランフランじゃないか！しかし、彼女は

……」

僕は病院を出て、のぞみちゃんがいる丘へむかった。

僕は車を走らせる。

辺りはほんのり明るさをとじもどしてきていた。

頭がもうひとつする、街を離れてどれくらいたつだろう、かなえはこんな遠くから歩いて来たのだろうか？

かなえが倒れていく中で、必死で僕に伝えようとした場所だが、本当にこんなところであつてるのだろうか。

「確かに…山だな」

はつきりした場所まではわからないが、一いち辺から登つてみると

僕は車をおりて中にのぼれそうな場所を探した。

これは、何か印をつくること帰つてこれなくなるよな。

僕は木に印をつけながら山の奥へと進んでいくこととした。

「のぞみちゃん、聞こえるかー」

くそ、草や枯れ木に足をとられる！ 傷だらけだよ。

「のぞみちゃん

一体どこにいるんだ？

僕はがむしゃらに山を登つてこく、早く早く見つけなくてはー！

ガサガサ！ ガサガサ！ 「いてつー」

「のぞみちゃん、いたら返事をしてくれー」

辺つて響を渡る僕の声は、何の反応もなく時間だけが過ぎていった。

「のや……へやおー声もかすれて庄へんなー。

それでも僕は必要で彼女を探しつづかる。

辺りが少しずつ暗くなつはじめてきた。

「嘘だろ、やつやまで思ひなかつたのこー。

」

必死になつていたからわからなかつたが、僕は山に入つてどれだけの時間がすぎたのか？

はつーしまつた！

僕としたことが、時計も携帯も家にあつてしまつた！

「なこひつてんだ僕は……へやおーー。」

体にあたる風が少し肌寒い…。

簡単なことじゃないのは理解していたが、こんな山の中、下手したら僕が死んでしまうんじゃないか！

いかん弱音をはくな！しつかりしろ！負けてたまるかー！

「はあ、はあ、」

あれ？

氣のせいだらうか、あそこだけ草が倒れて道が出来ている気が…！

明らかに不自然に倒れた草木の道は、まだ新しくできたような、こんな所人は通らないだらうし？

ひょっとしてかなえ…かなえが作った目印だらうか？

いやしかし、まさか！熊か猪のたぐいって可能性もー。

考えてる間にも田はドンドンと沈んでいく！今は考えてても仕方がないな、僕は獣道にそつて山をのぼった。

「はあ、はあ、はあ、」

あれから何時間歩いただろう、体力も限界をむかえよつとしている。

しかも、この獣道いつこうに終わりがみえてこない！

くそ、どこにいるんだ！ だいたい普通に考えて見つかるはずなんかないんだ、こんな広い山の中ー

心があれそだー！

「はあ、はあ、はあ、水ー」

「かなえーのぞみー！！」

意識がもぐもぐとする！

僕はその場に膝まずいてしまった。

「... た。... た。」

えつ？

遠くの方からかすかに人の声らしきものが聞こえた気がする！

僕は目を閉じて耳に集中する。

声の先

サラサラ、サラカラ

風にゆれる草木の音「ま、…ま」やつぱり人の声…

「のぞみちゃん…」

僕は無我夢中で叫んだ…「のぞみちゃん…」

あいつのかなえの娘に間違えない…

僕は声のする方にむかって走った、草木が激しく顔にぶつかる…

「くそ、邪魔だ…！」

「のぞみちゃん…じいだー…」

声が聞こえない！

かなえ以外の人間を知らずに育つたんだ！
僕の声にビックリしているのかかもしれない！

それでも僕は叫び続けた！

「のぞみちゃん
えつ？」

「うわああああああ！」

突然足元から崩れ落ちる！

嘘だろ！

「うわああああああ！」

何がおこったかわからない！

ただ僕は逆らえる」となく山を転げ落ちていく！

「うわああああああ！」

ザザサササササササ！ザザササササササ！

ドス！

「うるわしき」

いた。

「…が、…め」

見つけた

「かはあ…」

あれ？僕は？

いててててて！

体を動かそうとするが、全身に電気がながれるような痛みがはしる。

僕は…。

目を開けているのに、何も見えない！

。かなえはこんな真っ暗な中で生きてきたのか…

「漆黒の闇か…」

かなえ…。

「かなえ————！」

とてつもない恐怖におそわれる！

真つ暗な世界！

聞きなれない闇の音！

怖い！

ガサガサ！

「…………！」

ひたいから冷や汗が流れ落ち、全身震えが止まらない！

何の音だ！熊……か？鹿か？猿か？

僕の頭は恐怖でいっぱいになり、ただただ怯えることしかできなかつた。

たのむ、こないでくれ！こないでくれ！

ガサガサ！

ガサガサ！

「くそ！」

ガサ！

音が頭の上まできて止まつたのがわかる。

「へへ」

僕は思わず口をグッと閉じた！

「マムの……お前、何で

えつ？

驚きと共に口を開ける。

雲間から円明かりがやっこむ…。

人？女の子！かなえと同じ姿！

僕はあわてて体をおこやつとした！

「ついだだだだだ

「やややややや
ガサガサガサガサ！

しまつた、脅かしてしまつた！逃げないでくれ！

「のぞみちゃん、のぞみちゃんなんだろ？」

ガサガサ

「なぜ？私の名前……？」

やつぱり。

「よかつた！よかつた――――――」

ガサガサガサガサ！

「わわわーー！」めん逃げないで

思わず大声をはりあげてしまい、彼女をおどろかせてしまつ。

「ママに、かなえに頼まれたんだ、君を迎えてきたんだ」

「むかえ？むかえってなに？ママは？」

聞こえるか声が震えてるのがわかる！

「お前なに？ みたことない形？ ママは？」

「僕は、君のママと友達なんだ、かなえにたのまれて君を助けてきた？」

「友達？ 友達違う、 だってみたことない！
私達と同じ姿… でも違う」

違う？ そうか、男の存在もわからないからなのかな？

「動物達とも違つて、ママはアビリティ？」

「ああ！」

そう言って僕は、ポケットに手をいれる。

「いてててててて、ああ怖がらないで！」

「これみて」

僕がポケットから取り出したのは、かなえが持っていたボロボロの
ネックレスだった。

彼女がお風呂に忘れてた物だ。

「アーティストのため」

彼女が僕に飛び付いてきた！

僕はこいつと笑った。

「マジ、マジ、マジ

「うるさいな

やつ喧嘩で頭をなでる。

やつとみつけたよ、かなえ。

ああ、まさか本当にいるなんて。

正直未だに信じがたい事だらけだ！

しかもこんな広い山の中、見つかるなんて奇跡としかいよいよ。こいつがな

あとは向とか山を下りなければ！

しかしまいったなあ…。

せつかくつせたてきた田印も、崖からおひたら意味なこと。

この田明かりも靈にかくれれば真っ暗だ！

「お前、なんだ？」

えつ？

彼女がまじまじと僕を見ている。

「何つて？ そう聞かれるとなんて答えたらいっこんだ」

僕はクスリと笑う。

「お前、似てるけど私達と違うー。」

ん~！ やつぱりきっと男女の違いを言いたいんだろうな……。

簡単に説明したって理解なんかできないうちにさ~。

ペタペタ！

「ないー。お前にさ~れがついてないぞー。」

そう言つて彼女が服をまくりあげる！

！――！――！

「わあわあわあ――！――！――！」

僕はあわてて服をさげた！

「な、なんだ？」

なんだじゅわあーい！

ああ勘弁してくれー！

彼女の世界は本当に、かなえと自分といこに住む生き物だけがすべてなんだな。

「はあ～」

？」

やはり1田も早く山をおりて、かなえのもとに連れてこいつ！

体は痛いが、足も手も動かせる！

「あれのヤミちゃん、いいじじだかわかるかな?」

「ここが、山だ！」

うんそうだね！

「やうなんだかどや、のんみぢやんばいじがびーじり變かわかぬのへ。」

「わかるよ？」

「みじみじー・みかつた。

「それとさ、僕さここに落りる前にのぞみちゃんの声聞いたんだ、
のぞみちゃんも僕の声聞いたよね？」

彼女は「ククク」とつなずく。

「その場所まで帰りたいんだけど分かるかな？」

彼女はまた「ククク」とうなづく。

「よかつたーーーー！」

「いだだだだだ！」

「ビクー！ 彼女が飛び上がる！」

「ああいめんな、驚くよな

僕はゆつくつと体をおこした。

くうへこでえー！

「あこまで行きたいのか？その体でいけるのか？」

「大丈夫だよー！」

「わかった、すぐ近くだしついてきて

えつ？

「近いの？」

「そう、すぐそこーついてきて

そつとつて彼女は歩き出す。

「あ、まつて！ いだだだだだ

僕はあわてて彼女の後をおつた！

「ねえ、もうだいぶ歩いたけど後どれくらいかな？」

僕の足腰が悲鳴をあげている。

「もう少しだー！」

もう少しつづ...

彼女の距離感に嫌な予感がしてきたぞ。

僕は必死で彼女の後を追いかける！

そんな僕をよそに彼女はぐんぐん進んでいく！

「ちゅうと、まつてー！」

o

「くそおー、追い付けない

負けてたまるかあー！

ドン！

「いた！」 「いたあー！」

突然の衝撃、どうやら僕は彼女とぶつかってしまったようだ！

「ごめん暗くて下ばかり見てたから止まつてくれてたの気付かなかつたよ」

「? ? ? なにいつてるの、あれをみてただけ」

あれ？

彼女は真っ暗やみに手をむけているが、僕に何のことだかわからぬ？

「もしかして、何かいるの？」

「なにいってる？ あれだ！」

「はあ、僕には1メートル先もみえませんが……。

「あれと、同じものが家まで続いてるの、あんなのこの山の動物はできない、きっとママが作ったんだ！」

ひょっとして……。

「獣道のことをこいつてるの」

「獸道、なにそれ？」

「あ、えっと…草木が倒れてできた道だよ」

「みち？」

道も通じないか～！

「わっ さからり何を言つてゐるの？.」

ん～？

「ねえ、そこまで連れていくてくれないか？」

「連れていく？自分で行けばいいじゃないか」

「僕には見えないんだよ」

「ええええええ！見えないのか？」

「クククと僕がうなずいてると、彼女が不思議そつな顔をしていく。

「うひちだ」

そつ言つて彼女は僕の手をとつ歩きはじめる。

こんな環境で育つと暗くとも田がきくんだな。

「ほひ、見えるか？」

「ああ、あひがとうひまで来ればやみえるよ」

やはひの道はかなえが作った道なんだひつ、あひと僕に彼女の居

場所を教えるために。

「のぞみちゃん、上り坂の辺りになるのかな？」

「どの辺り？私の家よりだいぶ下の方だな」

下の方…。

「本当にママには絶対行つてはいけないって言われてるんだけど…」

僕がこの道を見つけたのは、山に登つていく途中からだが、彼女は僕がいた所まで近いと言つていたよな。

だとすると、方向的にあっちかー

「あのね、むしろの辺りに傷がついた木があるはずなんだけど…探すの手伝ってくれない？」

「傷…あれか？」

彼女まっすぐ指をさしている。

えええええー…おやか? こんな所からは見えるはずがない!

しかし、方向的にはあつてこいつてみるか!

「それにつれてこつてほじー!」

「わかつた…」

僕は彼女の示す方へむかって歩いた!

一歩（漫畫界）

お忙に入りにしてくれた方々ありがとうございました。

すみません、13、14部編集でかなり詰がずれてしましましたー。

こんな内容でもよろしくだれも方々ありがとうございました。

一步

彼女が指さす方に歩き続けてどれだけたつだろ？

いつたい彼女は何処を田指して歩いているのか？

すると、突然彼女がはしりだす！

ちよつとまつて！足場も悪くつまく走れない！

「ほり、これだ！違つか？」

「えつ？どれ？」

僕は木へと近づいて確認する。

。

嘘だろ…。

奇跡だ！

間違いない僕がつけた傷だ！

信じられない、あんな遠くからこの傷を見つけるなんて…。

僕はこんなに近づいてようやく見える傷なのに！

「なあ、あれもか？あそこも…。」

彼女が次々と指をさしていく。

。

すいじー、すいじーことしかにいようがない！

なんとなげだか方向感覚があれいら辺だと叫びつゝとわかる-。

「えつと、上の方向じゃなくて下の方向の木で印がある看起來つ
れていつてほしい-」

「……」

よしー希望が見えてきたー」これで無事山を降りる事ができるー

「アヤアヤ会えるんだよね?」

「あー…会えるよ-」

「わかったー」

そう言って彼女はまた僕の手をとり歩き始めた！

卷之三

ゼえー ゼえー ！ ！ ！ ！

もつてし、もつてしー

ドス！

「一九四一」

彼女の動きが突然とまつた！

「どうしたの？」

h
?

震える？

そうだよな、こわいよな、怖くないはずがない！彼女にとつてここから先は道の世界！

僕は繋いでた彼女手をぐつとござりしめる！

「大丈夫！」

「えつ？」

そして僕は彼女の前に一歩踏み込む！

「ここからは、僕が前に行くよしつかりついてきて

彼女の表情は暗くてわからないけど、繋いだ手を通して彼女の気持ちが伝わってくるようだ！

今までの道を通つてきてなんとなく先がよめてきた、それによく足下を見てみると草木が倒れて、小さな獸道ができる！

これは僕がつけた足跡だ！

もう少し、もう少しだ！

かなえ！

僕は大きな一步をあるきだした！

山の終わり

「のぞみちゃん、ここを抜けたら山は終わりだから」

「山が、終わる？」

「そう、山が終わる！」

「よく意味が分からぬい？山に終わりなんてないだろ？」

「そうだよな、僕も突然ここで地球が終わりますよ、なんて言われても理解できないだろ？ その先なんて想像すらつかない世界だ。」

「とにかく、山は終わるけど大丈夫だからー」わがらずに僕を信じて

「ははは、変な事言つなー！」

あれは、外の景色…ようやく見えてきた！

「ほら、のぞみちゃんあそ」が出口だ

「出口……？。」

しかし、本当によかつた！無事に帰つてこれたんだな！

彼女の足がピタリと止まる。

僕は彼女の手を強く握りしめた！

「大丈夫こわくないよ、ついておいで」

僕の目でも確認できる、草木が終わり人工的な道が始まろうとして

「この、この世界彼女の皿はまだついてこないだろ？」

「た、つのん…」

「えっ、今なんて？」

「たつのん…」

「どうして君が僕の名前を…」

突然のこと驚いてしまつ。

「思い出したの、ママがいなくなる前に「たつのん」って人が来た
うついていきなさいって」

「かなえが…」

「ママが何を言つてるかわからなかつたから忘れていたの、あなた

「ママの言ひたつのはなんの？」

「ああ、そうだよ」

「マヤ」

「わざ行」の

彼女は僕の腕をつかみピタリと横にはりついてくる。

「大丈夫だよ、ママと僕を信じて」

僕はそう言つて彼女の頭をなでた。

だんだんと草木はなくなり、田の前に道があらわれる。

「これ、何？」

「ん、これが道って言うんだ、この道がのぞみひやんのママの所までつながっているんだよ」

彼女はそっとしゃがみ道路をさわる。.

「小さな石がかたまって、大きな石になってる」

初めて見る道路か…これから見る物はすべて初めて見るものばかりだろうな、大丈夫だろうか？

さて僕の車は、あそこか。

「のぞみひやんきて、いくよ」

「えつ?うん」

彼女はそろそろそろそろと、道路を歩く。

すると、突然彼女が僕の後ろに身を隠しそうと指をさす。

「ねえ、あ、あれなーっ。」

「あれは、車ひいてしまつんだ」

「へ、る、まっ。」

「モツ、車、今からあれこのんだよ」

「のね。」

「モツ、乗るー。」

「わこのだらしが、彼女がよつとタコとせつてこでしゃる。」

「やく車に乗れるのかー、かなえまつてくれ、モツして貰える
からなー！」

説明

僕は彼女と一緒に助手席へむかう。

ガチャ

「さあ乗つて」

「…………。」

やつぱり、思つた通りの反応か。

「お前は、太陽をつかまえたのか？」

太陽？

「すごい！」

突然彼女が車に飛び付いていく！

「お、おー？」

「ビーだ、ヒーか？」

彼女が必死で 車内のライトを指差している、太陽…光か！

これは、いちいち説明していくのも大変だな。

「のんみちゃんとりあえずヒート座つてもいいえるかな？」

しばらくの間、じつと席を見つめた彼女は警戒しながらけわしい顔で、ゆっくり腰をおろした！

ひつ！

「ん? 何がおかしい?」

「いや、せん

さて、僕も車に乗るか！

いや、その前に。

僕は車においていた携帯を手にとつた！

うわあ、すごい着信だな！

「まいっただ……」

「どうした？」

「えつ？ いやなんでもないよ」

そう言って僕は苦笑いでかえす。

電池もギリギリだな。

ピッピッ…、プルルルル、プルルガチャ

「あ、もし…」「辰徳！……今どこにいるの？？」

電話の相手僕の姉だ。

「もしもし、何があったの？」

「会社から電話あつて、連絡もとれないし？何があったの、もしもしー。」

「ちよつ、姉ちゃん落ち着いてー電池ないんだ、詳しくはあつて話すよ、悪いけど今すぐ家に来てほしい」

「えつ？今から元氣あんた

「 プツン。

やつぱり落ちたか！

「なあ、大丈夫か？」

「えつ？」

ふと横に顔をむけると、鼻がくつつきそうになるくらい、彼女が僕をのぞきこんでいた。

「うわあ、大丈夫…って何が？」

「一人で何か言つてたから」

「あ…ああ大丈夫だよ。」

「なあ！」

「なに？」

彼女はボサボサの髪をかきわけながら必死で辺りをみ見渡している。

「太陽どうやってつかまえた？」

はは、これから質問攻めで大変そうだ。

「 のんみちゃん、今からもつと、もつとく『こじ』とおじるか? 」

「 あーこじ? 」

「 そう、だけど今は時間があまりないんだ、あとから説明するよ 」

「 せつめー? 」

ガチャ、ブルルルルル!

「 もやあああああ 」

車のエンジン音に驚く彼女、これからおじることに彼女がどうなるか、なんとなく予想がつくが… とりあえず僕は車を走らせた。

二か題の題

「 せせせせせせせせせせせせせせ 」

「 わかひこむんだが……。」

初めて体験する車、初めて体験するスピード、そりゃこわいだらうな……。

しかし、耳が痛い。

「…せせせせせせせせ」

卷之三

ん？突然彼女が騒がなくなつた。

「大丈夫？」

彼女の顔をのぞきこむように見る。

「小さな太陽がいっぱい、いや、夜だからお月様なの？それともお星さま？」

ああ町の明かりか、そうだなまるで陸にある月や星たちのように見えるな、いつも見慣れた景色だが今日は違う景色にみえてくる、や

つと帰つてきた。

「のぞみちゃんあの光の所にママがいるんだよ

「えつ？ 本当に？」

「ああ、もうすぐだ。」

アクセルを踏む足に力がはいる、本当に無事に帰つてしまつてよかったです。

時間は、深夜3時お姉ちゃんこんな時間に呼び出しても怒つてるかな。

僕は直ちくと車を走らせた。

僕たちはようやく皿洗につくことができた。

さて、と。

「のぞみちゃん少しの間だけここにいてくれないか？」

「うーん？」

「そう、こわくないから絶対にこの中からでないでほしい、必ずまた僕はもどってくるから」

彼女が「クリ」と頭を動かす。

「すぐもどるからね。」

僕はそう言つて車を飛び出した！

一応ロックかけとくか！

僕は彼女に手をふり、一足先に家にむかつた。

ガチャ。

「ただいま、姉ちゃんいる？」

バタバタ！

「辰徳……！」

「うわあ姉ちゃん声でかい、何時だと思ってるの？？」

バタバタ。

えつ？

「夙徳夙徳夙徳夙徳夙徳

「母さん、父さんも来たのか?」

とても心配そう、姉ちゃんにかんしてはとても怒ってるみたいだ
な。

「あんたね、なに考えて」

「ストーリー……」

僕は姉の言葉をうけあつた。

「な、なによ?」

「……、ビックリしないで聞こえてほし、今からひとつひとつすべて
事実だから」

みんな真剣な顔で僕をみている。

そして、僕は今までのことを簡単に説明した。

「……なにこいつてやの？」

一番最初に口をひらいたのは姉ちゃんだった。

「今、彼女は車で僕がくるのを待つているんだ

「本当に、かなえちゃんの？」

「ああ、姉さん間違いない！」

母さんはポロポロと泣き出した。

「母さん、大丈夫?」

とつさに姉ちゃんが母さんをささえる。

「彼女は、山を今まで一度も出たことがないんだ、人間もかなえ以外は知らない、とにかく何も知らないんだ」

信じがたいと言わんばかりに親父が首をかしげている。

「あまり一人にはしておけないからつれてくるよ、姉ちゃんお願いがあるんだ」

「な、なによ?」

「彼女、多分一度も風呂に入った事ないとと思うんだ、今の格好も見たらビックリすると思つけど、彼女をお風呂にいれてあげてほしい」

「わ、わかった」

「とにかく連れてくるよ

」やつ言つて僕は足早に車にむかつ。

車にむかうと彼女が僕を見つけて窓にへばりついている。

ガチャ。

「お待たせ」

髪で隠れてちゃんとした表情はわからないが、ビリヤウ支してへれたみたいだ。

「わあ、おつて僕につづいて」

彼女はゆっくつと車をおつて辺りをキョロキョロ見回してくる。

「ここはね僕の家だよ

「ええええ、家？」これが家なのか？」

「ああ、それとね家には僕の家族がいるけどみんなママの事を知つてこるからこわがらなくていいからね」

「かぞく？」

ん~やつぱりハテナでかえつてくる言葉は意味がわからないのだろうな、とくにかなえは家族なんて言葉は使わなかつたんじやないだろ~つか~。

「とにかく」わくないし、大丈夫だから」

彼女首をかしげながら「クソとつなづいた。

大丈夫だろうか~。

話をしている間に玄関へとたどりついた。

「わああああ

「わああああ

すべてが不思議な世界なんだろう、彼女は首がとれるのではないか
と思つぽぢキヨロキヨロとしながら驚いている。

ガチャ

「連れてきたよ」

彼女がとつそに僕の後ろに姿をかくした。

「大丈夫だよ」

ゆつくつと、僕の背中越しに顔を出す。

それを家族が驚きの表情でみている。

「母さん、姉ちゃん、父さんも彼女がこわがるから

「ああ」「めんなさい」、あがつて、えつと

「のぞみだよ

母さんがゆっくり僕たちに近づいてくる。

彼女は僕の腕を強く握りしめる。

「のぞみちゃん大丈夫だから

母さんがゆっくり彼女にふれて微笑んだ。

「ママに早く会いたいね、のぞみちゃんおばさんほんまあなたがママと遊んだの？

「え、ママと？」

「 もうよ、だから」わがらなくて大丈夫だから

「 うつむいて」口と微笑んだ、さすがだな…母親つらいよ。

すると姉ちゃんがゆっくつと手をのばしてきた。

「 の、みみちゃんにむけにいって、」わくないから

彼女はすっと姉ちゃんの手をみつめつくる。

姉ちゃんも動かすにじつと手をだし続ける。

すと彼女はゆっくつと姉ちゃんの手をとった。

僕は思わずホッとした。

「のんみちやん、そのままママの所にいけないんだ、少し……み
ず、水浴びしてきてくれるかな?」

「水浴び? 異なるのか?」

よし、通じた!

「匂は降りなこナビ、水が玉のトリハガあるから

「えつ~。やうなのか~す」こなー

「それから……」

姉ちゃんがゆっくつ髪をかきわけながら話しかかる。

「髪も切つていいかな?」

「髪をあらへなんでだ？どうやつてきるんだ？私もずっと思つてた、お前たちは何で髪が短いんだ？」

「みんなね、髪を切つてるから短いの、のぞみちゃんも少しだけ切つてみない」

「どうやら彼女は一生懸命考えこんでいる。

「それは、痛いか？」

「大丈夫痛くないよ

「わかった、いいよ」

みんないつせいに安心する、確かに彼女の髪は床につき、バサバサでとてもこのままにはしておけない状況だ。

「辰徳ハサミ用意して！それから先に彼女をお風呂場までつれていつてあげて」

「あ、ああ、わかった、行くよのぞみちゃんついてきて」

そして、僕たちは風呂場へむかつた。

「うるさいよ」

彼女はキョロキョロと辺りをうかがう。

「いいにおいだ、こんなにおこの花もあるんだな？初めてにわいでも花はどこにあるんだ？」

花？石鹼の香りを言つているんだな。

「のぞみちゃん、これは石鹼の香りだよ」

「せつけん？なんだそれ？」

僕はやつときからずつと考えていた、生まれた時から当たり前のよう¹に使つてきた物たち、いざ「何か？」と聞かれたら返答にこままる。

そして、その大切さが忘れてしまつてゐる。

「なあ？せつけんてなんだ」

「えつ？ああ」めん考え事してた」

バタバタ。

あわただしく足音が聞こえてくる。

「のんみちゃん、お風呂の前にこれ少し飲まない？」

やつぱり田舎さんがジースをもつてくる。

「ああ、めんせめんせ喉乾いてたんだよ、よくよく考えたら山から
何も口にしてないんだ！」

「やつぱり、のぞみちゃんお風呂は汗をかくから水分をとつていて
ほつがいいわ、はい！」

彼女は僕の顔をのぞきこむ。

僕は母さんからジュースをうけとり一気に飲み干した！

「うまー！ほらのぞみちゃん大丈夫だから飲んでみて

「はいどーぞ

彼女はゆっくにグラスをうけとけ口をつけける。

「冷たい！－

！
彼女の顔が凍りついた、そとかこんな冷たい飲み物も初めてだよな

「大丈…」 「あまあああああああい！…！…！」

ビックリした！・！・！・！・！

突然彼女が興奮して叫ぶ！

「なんだこれ？美味しい！」

「やつ、よかつたお風呂上がりにまた用意しておくから」「

母さんの言葉に首をかしげる。

「あとから、また飲めるって」

「本当に…！…！…！…いいのか？」

彼女は嬉しそうに飛び跳ねた！

「母ちゃん、彼女はこの世界を全くしらなーから、ちよこちよに理解出来ない言葉があるんだよ、だから彼女と話す時は言葉をえらばな
くちゃいけない」

「さうね、つこ普通に話してしまつわ」

「お待たせー、あら母さんびびつたの~」

姉ちゃんが服をもつてやつてきた。

「ジュース持つてきてくれたんだよ、それより姉ちゃん、彼女お風呂初めてだからお湯にビックリすると思つて、『気を付けてあげて』

「わかった、じゃあおまかせて、良徳はハサミ用意して脱衣場におこしておこして」

「ああ、わかった」

そして、僕はお風呂をはなれる。

姉ちゃん、大丈夫だろうか？

「じゃあ入る？ まづは服を脱いで

「わかった」

そう言つと彼女は服をゆつくり脱いで丁寧に床においた。

「えつと、あがつたらこれに着替えてね」

「きがえる。」

「こや、えつとこの服を着ていい？」

やつて私は服を見せた。

彼女は目を丸めて驚いている。

「いいのか？こんな綺麗なの着ても」

「ここよ、ここよ、使って」

彼女が嬉しそうに服をながめている、それにしても……なんて体、痩せてるもの気になるけど身体中傷と虫刺されのあとがすごい。

「どうした？」

「向でもない、じや、いつかきて

私はゆづくシャワーをひねる。

「わあどうなってるんだ……」

「すこじょ、をひってみて熱くない？」

彼女はゆつゝとお湯こてを伸ばす。

「温かい、すゞになど火を燃やしてるんだ?」

火を、そうか火はおこせたのね、と言つことは、お湯大丈夫じゃない。

「じゃあ頭にかけるよー」

バシャツバシャと楽しそうにシャワーをあびあて、シャンプーやリンス、石鹼の香りに驚ながらりも楽ししそうに笑つ、まるで小さな女子。

でも辰徳の話が本当ならもう二十歳前後の年のはず…見た目は背丈も小ちこしあつと若くみえる。

「姉さん、ハサミおことくよ」

「ああ、ありがとわ」

そつ言つて辰徳は脱衣場からでていつた。

「なあ、あいつは私達とは違つなどうしてだ？」

「違つ？」

「あいつは、声も、顔も、高さも、違つ！胸なんてペちゃんこでかたいんだ！」

「ああそれは、辰徳が男の子だからよー。」

「男の子？」

「そつかのぞみちゃんは男の人をしらないんだ」

彼女は大きく首をかしげている。
どう説明しよひ……。

「動物達のオスとメスはわかるのかな？」

「わかる」

「それと同じで人にも男の子と女の子がいるの、私達は女の子辰徳
は男の子」

「そうか、 そうなのか！ すごいな！ 何もかも初めて見るものばかり
だ！！」

「なあ人間はあと何人くらいいるんだ！」

「彼女が目をギラギラさせている。

「うーん、 分かりやすくいえば星の数ほど」

「星の数？」

「ナハ、夜空に輝く星へひここつぱー。」

「えつ?ええええええそんなこいるのか?...すいじ...めいこなー。」

「。」

「ナハ、ニッぱー。」

その頃僕は疲れていつとつとしていた。

「辰巳きこひるの。」

ああ聞いてるよ母さん、でも跟へて…。

「かなえ…」

「寝言かじり、冗談…」

「母さん疲れてるんだろ？ 少し休ませてあげなさい。」

「お父さん」

「ねえ、お父さん元徳の話しほどかしら?」

「さあな、明田病院に行けばわかるんじやないか」

「かなえちゃんが……なんだか信じられない! もし本当ならあの男……」

ガラガラー・

「あがつたわよ、つて元徳寝てゐるじゃない!」

「かなえちゃん……」

母さんとお父さんほどても驚いた表情でのぞみちゃんを見てくる。

「母さん、のぞみちゃんよー・私も正直ビックリしたー・髪を切つて顔
がみえたうそつくりです」

「ママ、ママの話か？」

「ん? あら、のんみちやんがママに泣いていたからみんなビックつ
してね!」

「私がママ?」

のぞみちゃんは恥ずかしそうに笑っている、そんな顔もかなえちゃんにそつくりで心が痛くなる。

「なあ、ママの所に行こう。」

「のぞみちゃんママね今は、体の調子が悪くて違う場所で眠つていいの、だからのぞみちゃんも今田ま、つてこつても必ずいべ朝だけど、休んでママがあきた頃に会つに行つ

「え？ でも…」

「大丈夫必ず会えるから」

のやみちやんは迷わず下をむいた。

「ママ、具合悪いのってたやすくぱつぱつからったんだ……ママが起きたらい出来るんだな？」

「うそ、約束！」

「ひょ、ちじ」

そつまつてのやみちやんはその場にねこりんだー！

「のやみちやん、いいなべて布団で寝よつー。」

「ふとさへ。」

「えっと、とにかくつけてやれー。」

のぞみちゃんはコクリとうなずいた。

そう言つて母さんが台所へバタバタとむかつう。

そして、のぞみちゃんは母さんが持ってきたジュースを嬉しそうに飲んだあと私と一緒に部屋をでた。

部屋に向かう途中で突然のぞみちゃんがどびはねる。

「そうだよね、のぞみちゃんはこれからもういろいろな体験で本当に大変かもしねー！」

「たいけん？」

「なんでもない、ほりこーが寝る場所だよ」

そこには大きな布団が一枚ひいてあった。

「うう？」

私は部屋に入り掛け布団をもちあげた。

「のぞみちゃんここに横になつて」

のぞみちゃんはゆつくつと、布団をふまないよつて、ぐるりとまわて私の隣にせつてきた。

「大丈夫、これが布団つていいて、とても暖かいの、わあのつてのぞみちゃんがゆつくり布団に体をおいた。

「うわあああああああ、なんだ柔らかくて気持ちいい。」

「でしょーーそして、」の掛け布団をかけたらあつたか！

「うわああああああああああーーー！」

「今日は私も隣にいるから何があつたら起こしてね、お休みなさい」

そつと私は部屋の電気を消した、しばらくのぞみちゃんは興奮してこるようで布団の中で暴れていたけど、やはり疲れていたのだから、今はぐっすりと寝てしまった。

夢

「ああー、たつのんあとだしだしたー」

「してないよー。」

「したあーー。」

「じゃあ、もう一回なー最初はグージャンケーン

「かなえー」

遠くの方から声が聞こえた。

僕とかなえは声のする方へ顔をむける。

「お母さんー。」

かなえのお母さんが元気よくてをふつてこむー。

いつも優しいかなえのお母さん、僕はかなえのお母さんが大好きだつた。

「おばれーこ」

僕も体全体をつかつて腕をふつた。

あれ？隣に誰かいる？

「辰徳君、かなえと遊んでくれてたの」

そいつ言つて近づいてきた、おばさんが僕の頭をなでてくれた。

「お母さん、今日はお仕事じゃなかつたの？」

「うん、あのねかなえにお話があつて帰つてきたの」

かなえと僕はお互に顔を見つめあい首をかしげた。

「「」」とこちちは

突然おばさんの隣にいた男の人が話しかけてきた。

「「」」こんにちは

僕とかなえは小さな声で返事をする。

「「」」めんなさい、辰徳君今日はちょっととかなえとお話があるから、
また遊びにきてね」

「はい、じゃなかなえ

「うん、バイバイ

おばさんとかなえ、そして男の人が一緒にてをふつている。

あの人は誰なんだろう？

ちょっと顔がこわかつたな。

次の日

「たつのん」

「かなえ！」

かなえの後ろから低い声がきこえる。

「おはよう、えっと」

「辰徳君だよ」

かなえの隣には昨日の男の人気が立っていた。

「おじちゃん、もう大丈夫だから帰つていよいよー。」

「そうかい、じゃあ5時に迎えにくるからね

」

そう言つて手をふりながら男の人人が帰つていった。

「かなえ、あの人誰?」

「……。」

「かなえ?」

「新しい…お父さんなんだって」

「えつ?」

えつ？あれ？真つ暗だ。

えりじてしまつたんだ！

「かなえー、かなえ」

えつ？れつかのおじわん

「あやああああたつのん助けへー」

かなえがおじわんにおわれてるー助けなきやー

「やめろーーーーーーーーーーーーーー

あれ？届かない！

体が動かない！

「たつのん、たつのん、たつのん」

「たつのん、どうして、助け…て」

「...」

「辰德！辰德！！！」

はああああああつ！

「はあ、はあ、ゆめ」

「辰德大丈夫？」

「母さん」

「どうやら僕は夢をみていたようだ、それは早い、二つの間にか眠つていたんだな。

「母さんのやみちゃんは？」

「大丈夫、のぞみちゃんはお姉ちゃんと一緒に寝てるから」

「やつか…」

僕はほつとした。

「それより、辰徳大丈夫なの？まだ早いからもう少し休みなさい…」

「あ、ああやつあるよ母さん心配かけて」めん

母さんは首をよこにふりながらゆっくり立ち上がる。

母さんつらそうだな、子供の頃からかなえをしつてるからな、母さんも辛いんだね。

「母さんも休んでくれよ」

「はいはー」

かなえまつてくれ、みんなをつれていいくもつすくあえるからな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9060x/>

世界を知らない少女

2011年11月20日09時18分発行